

続古今集の基礎的研究

谷 山 悦 子

序 説

続古今集は、二条家為家の独撰でないという点で、二条派からは異端視されてきた。しかし、いうまでもなく続古今は、古今・新古今の先蹤にならって、撰者も、為家・基家・家良・行家・光俊の五人であった。相当地に力量のある歌人が撰者になっても、それが単独撰である場合には、少なくとも撰歌の厚みや、多様性において、おのずから個人撰なるが故の個人的限界があろう。文学史的な視野から、四人共同撰の古今と貫之独撰の新撰和歌、五人共同撰の新古今と定家独撰の新勅撰、それらを対比してみれば、そういうことは、直ちに看取できる。俊頼や俊成ほどのすぐれた歌よみによって撰ばれた金葉や千載が、古今や新古今ほどには、高く評価されていないのは何故か。といっても、複数撰者の共同撰は、個人の単独撰よりも、常にすぐれているという風な、平面的な結論を期待して言っ

ているのではない。ただ両者の間には、何かの相違があろうと予想されるのである。それは些細なことのようであるが、文学史的研究、すくなくとも和歌史的研究において、撰集の風格なり意義なりを決定する要因の一つとして、必ず明確にして置かねばならない。にもかかわらず、従来の文学史家は、たとえば、古今は四人の撰者によって撰ばれたものであることを、型のごとく指摘しておきながらも、むしろ貫之の主導的役割などを強調することに終って、四人撰なるが故の実体と意義とを徹底的に追究したものは極めて乏しい。その点に対する不満は、私が本稿で続古今を研究の対象として取り上げる一つの動機となった。

ところで、続古今は、ふるくは増鏡に「面白うめでたし」などと評されていることもある。しかし、時代が下ると、たとえば似雲の「詞林拾葉」に次のような批評が見える。「おもしろうくいひつくしたる歌は秀逸なきものなり。それ故、続古今に秀逸なしといふことあ

り。統古今のうた、大方「明けて見ぬ」の歌のやうなるおもしろき歌おほし。しかれども一首おもしろくいひつくして余情なきなり。たとえば、わかかなの巻の歌「恋ひわぶる人のかたみとならせばやなれよ何とて鳴く音なるらむ」という歌を本歌として『時鳥なれよ何とてなく声の五月待つまはつれなかるらむ』此本歌のとりやう、さても上手なるとりやうにていひつくしよきうたなれども、秀逸体にてはなし。歌に余情なし」と。もちろん、作品の評価は時代や個人の好尚によって左右されることが多い。しかし似雲は一おう、統古今をもよく読んだらうで、その一面の欠点を具体的に指摘しているように思われる。ところが、現代における統古今観はどうであろうか。それは、たとえば「全体として特色がなく、高く評価することができない」（吉沢義則博士著「鎌倉文学史」東京堂刊）とか「見るべき価値を殆んど有していない」（久松潜一博士編「日本文学史・中世」至文堂刊）とかと、事もなげに片付けられているのが大部分でなかろうか。もしもそれらが二条派の人々から疎外され、また殊更に低く評価されていた統古今観を、無批判に継承する言説でなければ幸いである。そういう安直な判定を下す前に、現代の文学史家としては当然、現代人としての科学的検討を加えて行かねばならないのではあるまいか。最近、そういう点の反省もあってか、統古今に対して、基礎的な面から見なおそうとするものが、ぼつぼつ

あらわれている。すなわち、統古今に関する昭和三十年代の研究としては、家郷隆文氏の「統古今集の外形をめぐって」（国語国文研究第十号、昭三二・四）や井上宗雄氏の「真観をめぐって」（和歌文学研究第四号、昭三二・八）等があげられる。前者は、統古今の形態と成立事情とが、新古今に著しく類似している事を忠実に指摘し、後者は、真観・蓮行らが歌道師範家たる御子左家の歌壇制覇に挑戦する実態を、史実と文献とに即して詳細に分析している。統古今の基礎的な研究という立場からいえば、まずそのあたりから始めるのが当然と言いながら、いずれもまた統古今の外面的な、または部分的な検討に留まっている。統古今の世界に本格的な照明を与えるためには、更に別途の視点と方法とが数多あるうし、また、それらによって多面的に問題を提示することが必要になってくる。そういう意味で、本稿でも統古今の世界の基礎的研究の一端を試みるにすぎない。前述の如く、私はまず統古今は五人の撰者の共同撰であったというところに視野の焦点をおき、そういう共同撰の実態はどうであったか、またそれは独撰の新勅撰や統後撰と比較してどういう相違をもたらす結果になっているか、引いてはその文学史的意義はどのように認定すべきかを考察してみたいと思つのである。

注 本稿で使用する統古今および新勅撰・統後撰等の伝本は、次のとおりである。▲統古今集……正保板本（校註国歌大系本）

但し、本調査に必要な程度において、少なくとも、歌数の異同等については、「十三代集異同表」（樋口芳麻呂等編）によつて校合した。▲新勅撰集……為家本（岩波文庫）▲続後撰集……正保版本（校註国歌六系本）。その他も、大方流布本による。

第一章 続古今集の成立と撰者

第一節 成立に関する略説

為家に続後撰集を撰はしめた後嵯峨院は、再び正元元年（一二二五）に続古今集の撰進を、同じ為家（時に六十二才）に命ぜられた。続後撰奏覧の建長三年（一二五一）から八年後のことである。

為家は、父の定家が新古今と新勅撰とにわたり、生涯に二度まで勅撰撰者になり得たのと同じ光榮に浴して大いに感激している。しかし、三年後の弘長二年（一二六二）、為家の他に、藤原基家・同家良・同行家・同光俊の四人が撰者に加えられた。基家は後京極摂政良経の男、家良は大納言藤原忠良の男、行家は六条藤家の正三位知家（蓮世）の男で、詞花集の撰者顯輔の五代の孫にあたる。光俊（真徳）は二条家とは近い親戚にあたる葉室家の出身であり、源承口伝によれば、かつては御子左家に歌を学んだが、寛元四年（一二四六）同じく定家の弟子であった知家と心を合せて御子左家に叛旗を翻した者である。特にこの光俊は鎌倉將軍宗尊親王（後嵯峨帝皇

子）にとりいって、その歌道師範となり、関東の威勢を背景にして撰者に加つたのである。これら「反御子左派四人の撰者追加」（井上宗雄「真観をめぐる」）和歌文学研究、昭三二・八）という新事態に對して、為家は怒りもし失望もして、「玉津島あはれと見すや我が方は吹きたえぬべき和歌の浦風」（玉葉雜五）と詠じ、為家の良きパトロン前太政大臣実氏も「代々撰者皆秀逸をよみてゆるさる今の撰者の秀歌いづれにか」（源承口伝・井蛙抄）と非難している。

この撰者四人の追加は、前述のごとく正元元年院宣が為家に下されてから三年後の弘長二年であり、続古今奏覧は、この弘長二年からさらに三年後の文永二年（一二六五）十二月二十六日であった。最初院宣から奏覧までは実に六年間も費したことになる。定家独撰の新勅撰においては、貞永元年六月十三日（一二三二）勅命が下り、三年後の嘉禎元年（一二三五）三月十二日に實質的完成日をおかえている。（新勅撰の奏覧日に関しては、異説もあるが、いずれも決定的ではない。ここでは、「新勅撰和歌集」久曾神昇、樋口芳麻呂両氏校訂（岩波文庫、昭三六・四・二五）の説による。）また為家独撰の続後撰においては、宝治二年（一二四八）七月二十五日に院宣が下り、三年後の建長三年（一二五一）十月二十七日に奏覧の日を迎えている。続古今も、もし独撰ならば、弘長二年頃までにはすでに奏覧のはこびになっていたはずである。家郷氏が指摘され

ているように、（「統古今集の外形をめぐって」国語国文研究第十号、昭三二・四）統古今は、その外形を整えるのにあたって、類似の状勢下にあった新古今の先蹤に学んだと見られるが、その新古今も、建仁元年（一一〇一）十一月に後鳥羽院の院宣が下り、元久二年（一一〇五）三月二十六日に一おう成立している。そのあととも切継が行われてはいるが、とにかくひとまずの奏覧までは、統古今のように六年間も費したわけではない。そういうところからも、統古今の五人の撰者間には、撰集事業の進歩をにぶらせるほどの激しい違和があったのではないか、また、始め三年間の為家の努力の結果は、あまり利用されなかったのではないかなどと言うことが想像される。しかしながら、従来言われているように、為家以外の四人の撰者は、果してすべて反御子左派であったのだろうか、また六年もの歳月をかけて成立した統古今は、果して「見るべき価値を有しない」ものであったのだろうか。

第二節 五人の撰者

——統古今集と各自の独撰々集との

撰取関係を中心として——

為家による宗匠の歌壇支配と御子左派の歌風とに叛旗を翻した光俊・知家は、後嵯峨院をはじめ基家・家良らの権門にとりいった。そして、彼等と御子左派との対立は、為家・光俊が相次いで世を去

るまで約三十年続いたといわれている。たしかにそういう事実は認められるのであるが、統古今撰者の内、為家以外はすべて、人間関係における派閥の上でも、歌風の上でも反御子左派であったのだろうか。福田秀一氏も、「鎌倉中期歌壇史における反御子左派の活動と業績（上）」（国語と国文学、昭三九・八）において、反御子左派の成立とその構成メンバーとをこの派主催の三歌合（御子左派を除いた歌合）（寛元四年十二月「春日若宮社歌合」・建長八年九月十三夜後九条内大臣基家「百首歌合」・文永二年七月二十四日「歌合当座」）の出詠者から推測して、為家以外の撰者四人を一応反御子左派ときめておられる。しかし、これら三歌合のみから、そういう判断を下すことには、いささか疑問がある。たとえば、知家判の春日若宮社歌合（寛元四年十二月）や光俊判の文永二年（七月二十四日）歌合には、御子左派系の人々のみならず、基家・家良らの貴顕は出詠していない。建長八年基家家百首歌合には、御子左家と関係の深い信実およびその一族が出席している。それらのことはどう考えるべきか。かりに福田氏の言われる通りであるにしても、そういう反御子左家の派閥的グループが、直ちに歌風の上でも反御子左家的事であったかどうかについては、更に慎重に検討されねばならない。たとえば、そういう、反御子左派の撰者が多数を占めたはずの統古今において、これら三歌合から、その歌を採っているのは、建

長八年基家百首歌合からの十首のみで、他の二つの歌合からは一首も採っていないのはどうしたことか。少なくとも、彼等の政治的、社会的立場の対立、また人間関係における深闊の対立を直ちに歌風や理念の対立と混同してはならない。そこで私は、それぞれの撰者の私撰集（万代集：家良撰 宝治二年（一二四八）夏成立；秋風集：光俊撰 建長三年（一二五一）成立（安井久善氏説）、雲葉集：基家撰 建長五年（一二五三）成立）と統古今との（また、ついでに統後撰との）重出歌数を調査することにより、そういう面から彼等の親疎関係を今すこし明らかにしてみたい。調査の結果は次表の如くである。

	A		B		C		D	
	総歌数の (首)	万代集と 重出歌 (家良撰)	比率 %	秋風集と 重出歌 (光俊撰)	比率 %	雲葉集と 重出歌 (基家撰)	比率 %	
統後撰 (為家撰)	二二六	329	24.0	58	4.2			
統古今 (五人撰)	一九五	274	14.2	167	8.7	160	8.3	

右の表でまず注目に値するのは、①統古今と万代との一致歌の比率一四・二％であつて、それは統古今と秋風との一致歌の比率八・七％、統古今と雲葉との一致歌八・三％をはるかに上まわつてゐるという事実である。次に注目すべきことは、②統後撰と万代との一致歌の比率が実に二四・〇％の高率を示し、統後撰と秋風との一致

『統古今集』の基礎的研究

歌の比率は、さすがにわずか四・二％という低率である点である。これらの結果は、万代所収歌の絶対数が他集のそれよりも圧倒的に多いということに原因しているとも考へる。そういう点を割引くとしても、やはり何かの傾向がうかがえそうである。すなわち、まず前者①についていうならば、統古今では、万代風な、すなわち家良好みの歌が、むしろ基家好みや光俊好みの歌よりも、かなり多く採られているのではないか。少なくとも相当の比重で採られていると考へられる。次に後者②については、為家と光俊とは歌風の尚好の上でも確かにきびしく対立しているが、為家と家良との尚好はそんなに隔絶したものでないばかりか、むしろ親近関係をさえ認めうるものではあるまいか。すなわち、家良は、派闊的にはどうであつたにせよ、その尚好の上では決して反御子左家風とは断定できない。家良自身の詠風は、福田氏も述べられているように、穩健であり、御子左家風と相容れないものではなく、御子左家派でもこれに好意を寄せていたようである（国語と国文学、昭三九・八、前引）。ところが、その家良は、基家と再従兄弟の血縁関係にありながらも、むしろ基家の歌の表現を難じたことが、源承の「和歌口伝」や二系為世の「和歌庭訓」にも見える。「明方の天のとわたる月かげにうきひとさえや衣うつらん（基家）是は世にも秀逸と思へるにや。しかるに、衣笠内府（家良）、うき人さへや衣うつらんといへる、無下の

傾城かなと侍ける由、先人語り侍りき」(源承口伝)。そういう家良と基家との違和感は、次に表示するところ(統後撰・万代・秋風・雲葉の各集に入集した五人の撰者の各歌数)によっても明らかに裏付けられる。

	統後撰 (為家撰)	万代集 (家良撰)	秋風集 (光俊撰)	雲葉集 (基家撰)
為家	11首	31首	21首	10首
家良	14首	10首	23首	5首
基家	8首	0首	12首	7首
光俊	10首	7首	0首	8首
行家	2首	7首	8首	1首

すなわち、基家撰の雲葉では、家良の歌は五首しか採っておらず、逆に家良撰の万代では、基家の歌は一首も採っていないのである。そして、ここでも家良は、五人の撰者のうちでは為家を圧倒的に高く評価し、基家に対してはもろろんのこと、光俊に対しても、あまり高くは(少なくとも、為家がかつて統後撰において、基家・光俊を評価したほどにも)評価していないと言える。逆に、基家の家良に対する評価も低い。が、その基家にしても、為家に対しては、(家良が為家を圧倒的に高く評価したほどにはないにしても)為家の方を、光俊以上に評価している点に注目しなければならな

い。更に光俊になると、彼は特に家良を優遇し、わずかの差ではあるが、家良を為家よりも上位に据えている。そして光俊の基家に対する評価も、むしろ為家の基家に対する評価と大差がない。なお、光俊は行家をかなり高く評価している点が注目される。

これらの撰者の具体的な歌風は、第四章で詳しく検討することにするが、以上の如き結果からも、統古今撰者間の各人の尚好面や、感情面における親疎関係は、単純に——たとえば、為家以外はすべて反御子左的などと——割切れるものではない。そういう意味で、本節ではまず、五人の撰者間の対立関係についての従来旧説に修正を加える必要があることを指摘したのである。

第二章 統古今集の形態的考察

——特に統古今と新勅撰・統後撰の

両集との比較を通して——

第一節 先行勅撰集との一致歌

——編集の正確度の問題——

先行勅撰集歌の重出ということは、必ずしも撰者の粗漏とばかりいえない。しかし一応はその撰集作業の正確度をはかる座標の一つになると思われる。契沖の「河社」富永春部の「撰集考異」等により、試みに新勅撰・統後撰・統古今の三集における先行勅撰集との

重出歌を調べてみると、次の如くである。(調査結果の詳細は省略する。)

新勅撰集における先行勅撰集との重出歌	8頁
統後撰集	5頁
統古今集	1頁

この結果からも明らかのように、統古今では先行勅撰集との重出歌は、ただ一首にすぎない。すなわち、単独撰の新勅撰・統後撰に比べて、統古今の場合は複数撰者であるが故に目が行き届いて、そういうミスは少なくなることができたとも言えよう。(もともと統古今の撰者のうち、家良は奏覧の前年に没しているので、こういう編集整理段階では参与していない)。この問題の一首は、すでに新勅撰羈旅歌に読人知らずの歌として採られている「苦しくも降来る雨か三輪の崎さの渡に家もあらなくに」(統古今集でも羈旅歌々に見える。もとは万葉卷三所載の長忌寸奥麻呂の歌)という有名な歌である。為家はこれがすでに父定家撰の新勅撰集に採られていることに気づかず、また万葉に対する造詣の深かったはずの光俊らもこれに気がつかなかったのは、どういうことであろうか。為家は、弘長二年、撰者四人が追加されてから立腹し、意欲をなくした事はすでに述べたが、「井蛙抄」(雑談六)に為家の孫為世の言として

「民部卿入道、我が撰進の歌の外は、一事以上不可有申子細とて、口を閉ぢ侍りき。和歌評定の時、治定の事も後申改む」とあるように、為家は不満をいじながら、歌の撰進には携わっており、編集、評定の事に関しても、最終的には改訂を申し入れたりしているのである。しかし、その不満からくる熱意のなさが、こういう結果となって現われたのだろうか。また、光俊らの万葉字も、それほど浅薄なものであったのだろうか。それはいずれであるにせよ、統古今における先行勅撰集の重出歌が、ただこの一首にすぎないということは、確かに複数撰者なるが故の見事な一収獲といえよう。

第二節 歌合との撰取関係

——撰歌資料の量的問題および

撰者勢力の均衡——

新勅撰・統後撰・統古今は、それぞれの撰歌の時代的上限については同じ方針を採っている。すなわち、三集とも上古万葉以来の歌を撰んでいる。しかし、上古以来という、いわば時代的には無制限な撰歌範囲の中で、統古今の撰歌資料の多寡は、他の二集と比較してどうであったか。これは、あらゆる先行文献資料にあたって調査されねばならないが、ここでは主として歌合を中心として調査する。すなわち、三集は歌合を撰歌資料とするにしても、それぞれどれほど多くの歌合にあたり、またどれほど多くの歌合歌を採っている

るかを調べてみた（この調査にあたっては、「平安朝歌台大成」〔萩谷朴博士著〕・「群書類従」・「国歌大観」・「中世歌台集」〔谷山・樋口編〕等をテキストとして用いた。〕結果は次表のとおりである。
 （新勅撰・統後撰・統古今に採られた個々の歌合名およびその歌合歌の一覧は省略する。）

	新勅撰	統後撰	統古今
A 総歌数	一三四	一三六	一五五
B 歌合歌数	146	137	204
比率 B/A (%)	10.6	10.0	10.6
C 歌合篇数	49	52	86
比率 C/A (%)	3.6	3.8	4.7

右の表に見られるように、三集に採られた歌合歌の数は、その絶対数においては、統古今の二〇四首が一番多い。しかし、統古今は、すでにその総歌数(A)一九二五首が他の二集より多いので、その総歌数に対する歌合歌(B)の比率を求めると、他の二集ともあまり大きな相違はない。すなわち、歌合歌は三集ともそれぞれの総歌数の約一割程度ということになる。しかし、歌合篇数(C)において、統古今のそれは四・七％であり、他の二集のそれを一％ほど引き離している。これも複数撰者であるが故に、単独撰者である場合よりも、より

多くの歌合資料にあたり得た結果でないかと考えられる。更に、三集は特にすれかの歌合に対して偏向を示していないかを探ってみると、まず有名な六百番歌合（建久四年）があげられる。この歌合から新勅撰は八首、統古今は七首を採っているのに、統後撰ではわずかに一首しか採っていない。いうまでもなく、六百番歌合は名門九条家の良経が主催した歌合であり、新古今歌壇を形成する大きな足場となったものであるだけに、この歌合から新古今に撰されたものだけでも三十五首もある（峯岸義秋著「歌合の研究」三省堂、昭二九・一〇）。更にいえば、六百番歌合には、いわゆる新古今風の歌が多いと考えてよからう。新古今的绚烂を嫌った為家が、この歌合から一首しか採らなかったことは、彼の平明な歌風から考えると、むしろ当然の結果といえよう。また同様に、新古今に九十首（有吉保「千五百番歌台と新古今和歌集」国語と国文学、昭三五・九）も採られている千五百番歌合（建仁元年秋）からこれら三集への撰取歌数をみると、新勅撰では二十一首（11.5％）、統古今では三十八首（21.9％）なのに、統後撰は十二首（10.4％）にすぎず、ここでも為家撰の統後撰では新古今風の歌を嫌っていることの実態が具体的にうかがえよう。と同時に、統古今では六百番歌合や千五百番歌合の歌、特に後者のそれがかなりの数にのぼっているが、これは統古今における為家以外の撰者の尚好がそうさせたのだと考えざるを得な

い。また、全く御子左派の人々を排除した基家百首歌合（建長八年九月十三夜）から、続古今は十首撰取している。しかし、この数字は、続古今撰者間における反御子左派の勢力を示す一つの拠所になりそうにも思えるが、実はこの歌合はすでに続後撰成立以後のものだから、続後撰に一首も採られないのは当然のことであり、それ

との比較はできない。むしろ、同様に反御子左派のメンバーだけで構成された他の二つの歌合「春日若宮社歌合」（寛元四年十二月）と「歌合当座」（文永二年七月二十四日）とからは、続古今に全く一首も撰取されていないという事実もある。また続古今は將軍宗尊親王家歌合（弘長元年七月七日・基家判）からもわずか三首しか採っていない。もしも、光俊らが五人の撰者中で圧倒的勢力をもち、為家を完全に除外して撰集していたならば、これらの歌合からはもっと多くの歌が採られたのではないだろうか。そういう意味では、続古今はやはり五人の撰者の然るべき均衡の上に成立していると言へべきであろう。とにかく、為家は俊成・定家と続いた和歌師範家の伝統と権威とを温存している。これに対して、光俊らが多少の異風を唱えても、その伝統と権威とは、一朝一夕にして崩れ去ったものでないことを改めて確認する必要がある。続古今といえども、それは伝統的拘束性の強い勅撰集の一つである。そういう既成勢力を打破するためには、反御子左派の人々のより強力な結果と閉結

とが要請されたのではないか。にも拘らず、前節で述べたように、続古今五人の撰者中、為家以外の四人がすべて反御子左家的存在といえるかどうかは疑わしい。しかも、彼等四人の相互間には、必ずしも一致した協力が欠けていたのではないかと考えられる。

第三節 部立をめぐる

——五人の撰者の一人として

光俊の発言力の限界——

撰集がその形態を整える必要上、まず部立の決定に慎重な考慮が払われているであろうことは想像できる。続古今の部立については、すでに家郷氏が新古今の部立に類似していることを指摘されたが、「続古今集の外形をめぐる」国語国文研究第十号、前引。これを新勅撰・続後撰のそれと比較してみるとどうであろうか。続古今の部立は、千載・新古今の部立と比較すると、四季・恋・雑の六部は勿論のこと、残りの離別・哀傷・賀・釈教・神祇・羈旅の六部も全く共通である。ただそれぞれの部立の順序に前後するところがあるだけである。ところが、新勅撰と続後撰は共に十部で、続古今にある離別・哀傷の部を含まない。従って、部立の大綱については、続後撰の撰者為家は父の撰んだ新勅撰に依拠し、続古今の撰者達は、同じ複数撰者であった新古今に依拠したと考えてよいのであろう。これを為家の立場からいえば、為家は部立については他の四人の撰

者の意見に押しきられた、あるいは他の四人のなすままに任じたということになる。それでは、そういう部立などにおいて大きな発言権をも持ったのは誰か。井上氏等の主張されたように、「真観をめぐって」和歌文学研究第四号、前引）続古今の撰歌において主導権を持ったのは光俊であるとすれば、この部立にも光俊の意見が大きく反映していると思なければならぬ。ところが、それも考えられないことが、神祇・釈教の二巻にある。（神祇・釈教の二巻を最後の第十九・二十におかず、前半の巻九・十にもってきたのは、新勅撰が最初で、先行の勅撰集にはその例を見ない。続後撰・続古今もこの点では新勅撰の例にならったのか、この二巻をいずれも巻九・十、または巻七・八に据えている。）すなわち、新勅撰・続後撰・続古今の三集で、この両部を神祇・釈教の順で並べているのは、古今のそれによったものだろう。その新古今において、千載における釈教・神祇の順序を逆に改めたのは、小島吉雄博士の言われたように、かなり重要な意義を持っている。この変更理由に関しては古来の文献に説明したものがないが、小島博士の推察されたように、おそらく釈教より神祇を尊重する精神に基づいたものであろう（「新古今和歌集の研究」昭二一）。ところが、詳しく言えば、父谷山茂が言ったように、「千載和歌集の研究」昭三六・三）千載以前の撰集では、神祇・釈教の部こそ設けてはいないが、雑部に神祇・釈教の

一連の歌を収める場合、むしろ神祇・釈教の順で収めていたのであり、千載こそがその先例を破って釈教・神祇の順としたのである。従って、新古今で再び神祇・釈教の順としたことは、復古精神につながるものでもあったのである。ところで光俊撰の秋風では、実は千載ならってか、釈教・神祇という順序を採っている事に注意しなければならぬ。続古今において、もし五人の撰者のうち光俊の発言権が独裁的に強かったならば、彼はおそらく神祇・釈教の順序にしないで、秋風の如く釈教・神祇の順序としたのではあるまいか。そういう点でも、続古今撰進事業における光俊の強い発言権を力説される井上宗雄氏らの説は多少修正されねばなるまい。光俊がいかに宗尊親王のバック・アップを受け、また五人の撰者中ではかなり強い発言力を持っていたとしても、所詮は五人の撰者の内の一人である。その光俊だけが続古今撰進の独裁的主導権を握っていたとは考えられない。すなわち、貴顕撰者基家の意見はもちろんのこと、続後撰以来の撰者為家の意見も相当に大きく聴き入れねばならなかったであろう。

第四節 所収歌人の員数

新勅撰・続後撰・続古今の各集では、それぞれどれほど多くの歌人を擁しているかを調べてみると、次のような結果になる。

続後撰において、所収歌人の員数が、二九・六多と他の二集をリードしているのは、為家が群小歌人の歌をも多く採り入れたからだ

	A		B	
	総歌数	歌人総数	B/A %	一人平均 A/B首
新勅撰	一三四	384	27.9	3.6
続後撰	一三六	407	29.6	3.4
続古今	一九五	467	24.3	4.1

ろう。従って、ここでは一人あたりの平均歌数は三・四首となる。

父定家の我執の強い性格とは異り、温厚な人物であった為家が、平淡な歌風を理想とし、無難な歌風を好んだ事は、すでにしばしば指摘されているところである。その彼の尚好にあう歌といえは、今までの著名歌人の天才的な作よりも、むしろ無名の群小歌人の平凡な作の中に多くあったのであるまいか。「和歌を詠する事、必ずしも才学によらず、ただ心よりおこる事と申したれども、稽古なくては上手のおぼえとりがたし」(詠歌一体)という為家のことばは、彼の凡人稽古主義の立場を示すのに十分である。しかし、続後撰において、為家がそういう群小作家の歌を少しずつ多人数にわたって採ったということは、必ずしも彼の理念的な方向だけでは考えられない

い。そこには作品の問題よりも、情実的な問題が考えられるからである。すなわち、政治的権力の座からの注文があるままに、或いは入集を切望する人々の懇請があるままに、作品の優劣はしばらくおいても、乞われるままに撰び入れるというふうなおそれが、独撰の場合、よほどしっかりした撰者でないかぎり、ありやすかったかとも思われる。自我の強い定家でさえも、新勅撰において、政治的圧力のために、あるいは情実でいれた歌が相当にあることは、(定家は新勅撰において貴顕の干渉を排除しきれなかったことを明月記にも告白している)その一人あたり平均三・六首という、続後撰とあまりかわらない数値によっても証明される。しかし、続古今では五人の撰者間に違和感があったため、却ってそういう情実を認めあうことなく、互に牽制しあうことによって、たまたまその弊を免れているのではあるまいか。またかりにそういうふうに見るのはうがち過ぎであるとすれば、続古今はやはり五人の撰者によって精撰されたが故にしぜん凡庸歌人の凡作は捨てられて才量のある歌よみの秀歌が多く採られることになったと考えられる。それがまた所収歌人数の比率は他の二集よりも低く、一人あたりの平均歌数は多いという現象となって現われているのである。もしそうだとすれば、続古今はやはり複数撰者であったことの長所を、こういう一面においても発揮していることになる。

第三章 統古今集の質的考察

第一節 多数入撰者

新勅撰・続後撰・統古今の三集において、どういふ歌人の歌が、どういふ比重で入集しているかを調べて見ると次表の如くである。

		三集	
		順位	
10	実氏 17	道家隆家 18	知家 32
9	相模 18	知家 19	順徳院 35
8	雅經 20	慈鎮 22	土御門院 38
7	道家 25	後嵯峨院 23	家隆 41
6	実朝 25	土御門院 26	為家 44
5	慈円 27	後鳥羽院 27	後鳥羽院 49
4	公経 30	良経 28	後嵯峨院 54
3	俊成 35	俊成 29	定家 56
2	良経 36	実氏 35	実氏 61
1	家隆 43(見)	定家 43(首)	宗尊親王 67(首)
	新勅撰	続後撰	統古今

右の表は三集の多数入撰者を第10位まであげたものであるが、ここからも三集の偏向なり撰者の態度なりをある程度までうかがうて

とができるのではあるまいか。

まず三集におけるこれらベスト10の各個人の入撰歌数をみると、統古今の各個人の入撰歌数は他の二集のそれに比べてはるかに多い。このことは、前節で述べた個人あたりの平均入集歌数の場合と符合する。次に、統古今においては前二集でベスト10に入っていた九条家系の良経・慈円・道家の三者が後退していることに気付く。藤平春男氏が指摘しておられるように、新勅撰には、定家と直接、間接に関係のある人々の歌が多く、特に新勅撰に始めて撰入された歌人には、定家と私交のある者が多い(「新勅撰和歌集の歌風をめぐって」和歌文学研究第九号)。定家は特に九条家・西園寺家の人々と親しく、前掲の表でも明らかのように、新勅撰では、彼等すなわち良経・慈円・道家(九条家)、公経・実氏(西園寺家)の歌は御子左家の鼻祖俊成と共にベスト10にはいっていない。そして、それは続後撰でも大体に継承されていたのに、統古今では特に九条家の人々が俊成と共に一挙にベスト10から脱落している。(統古今撰者中には、九条家の基家に加っているのに、これは一寸不思議な現象とも見られる。)しかし、これも統古今は五人の撰であるが故に、定家・為家と継承された九条家偏重の風が、是正されたとも考えられる。ところが、その九条家出身の基家自身の入撰についてはまた逆に顕著な偏向がある。すなわち、新勅撰が成立した時、基家は32才、すで

に歌人としての修練も資格も十分にできていたはずの年令である。また、その父良経・兄道家・一族の慈母らはそれぞれベスト10に入っているにもかかわらず、基家のみはどうしたことか新勅撰に一首も採られていないのである。とにかく、九条家一般の人々に対しては好意的であった定家であるのに、この基家に対してだけは、随分ときびしくあたっていている。そういう所には、やはり定家の激しい気性の一面がうかがえる。そして、基家もこの頃を起点にして、何か含むところがあつて、反御子左派の態度を示すようになったのかも知れぬ。またこの基家は再従兄弟の關係にありながら、家良と仲が悪かったことは第一章第二節で述べた通りであるが、定家はその家良（当時43才）の歌は新勅撰にも七首採っている。ところで、為家は、父定家と基家との不和を意識してか意識しなくてか、続後撰にその基家の歌をも八首採っている。（家良の続後撰入撰歌は一首。）（ここにも為家の穩健な人柄がうかがえてつである。さらに続古今になると、基家二十一首、家良二十六首と歌数の上では家良の方がやや依然として多く入撰しているが、前集、前々集における入撰歌と比較してみると、家良よりも基家の方が入撰増加率は高い。このような点でも、むしろ続古今が五人の撰であるが故に、定家以来の偏見を是正しているとも考えられよう。また続古今では入撰歌数第一位者が宗尊親王であることは、すでに諸家の指摘されること

く大いに注目すべき所である。続古今奏覽当時の親王は、二十四・五才の青年にすぎない。その若い彼の歌が、実氏・定家または三上皇の入撰率をおさえて第一位におどりでたのは、当人の実力の然らしめたことの他に、やはり光俊・基家らの推挙するところが大きであつたからであらう。しかし、そのことからまた直ちに続古今の風格は宗尊親王風、またはそれに近い風が中核をなしているなどと考えられることは許されない。それは、新古今において西行の歌が最も多く採られているからといって、直ちに新古今は西行調であるなどと言えないのと同様である。続古今の性格や風格の具体的内容に関しては、更に第二節において個々の歌に即して吟味するが、この節ではまず三集の多数入撰者を通覽して、続古今は複數撰者であつた為か、新勅撰・続後撰と続いた偏向の若干を是正している点を指摘したのである。

第二節 続古今の性格・歌風

続古今における各時代別作者の歌の撰取状態を調べてみることは、また本集の性格なり歌風なりを、客観的に把握する一つの手がかりとなるであらう。各時代別といっても、これをあまりに細かに時代分けをしたのでは、また意味がなくなりそうなのでひとまず和歌史における主要な三大時代区分、即ち、万葉・古今・新古今の

そのことからして、続古今撰進にあたっては、とにかく万葉に關しては、万葉の歌をやや多く採ったというだけのことには終っているのではなからうか。光俊らも本質的には、沈滞した歌壇に万葉による新風を送りこむほどの独自性と力量とを持ち合わせていなかったのではないか。

しかし、単に数量的な面のみからではなく、新勅撰・続後撰・続古今に採られている万葉歌人の歌は質的にどういうものであったかを具体的に吟味して見なければならぬ。

一、新勅撰に採られている万葉主要歌人の歌

① 白露と秋の花とをこきませてわくことかたきわが心かな（秋上・三三・人麿）

② あしひきの山した風は吹かねども君が来ぬ夜はかねて寒しも（恋・四八三・人麿）

③ 山もとに雪は降りつつしかずがこの川柳もえにけるかも（春上・三三・赤人）

④ 秋萩のうつろふおしと鳴く鹿の声聞く山はもみぢしにけり（秋下・三三・家持）

二、続後撰に採られている万葉主要歌人の歌

⑤ 天の川霧たちわたる七夕の雲の衣のかへる袖かも（秋上・三三・人麿）

⑥ あし引の山田のひたのひたぶるに忘るる人を驚かすかな（恋・五六八・人麿）

⑦ 一とせにただ今宵こそ七夕の天の河原にわたるといふなれ（秋・下四四・赤人）

⑧ 秋霧に妻まとはせる雁がねの雲がくれ行く声のきこゆる（秋中・三三・家持）

三、続古今に採られている万葉主要歌人の歌

⑨ 萩の花散らば惜しけむ秋の雨しばし降りそ色のつくまで（秋上・三三・人麿）

⑩ この山の嶺にちかしとわが見つる月の空なる恋もするかな（恋・一二〇君・人麿）

⑪ 山の端に月のいさよふ夕ぐれは檜原がうへも霞みわたれり（春上・四〇・赤人）

⑫ うば玉の夜はふけぬらし玉くしげふたかみ山に月かたぶきぬ（秋上・三三・家持）

以上の如くに列挙して見ると、いずれも一応万葉調に近い歌を選んでいと言えそうである。しかし、たとえば同じく秋歌にしても「白露と秋の花とをこきませて」(①)、「鳴く鹿の声聞く山はもみぢしにけり」(④)、「一雲の衣のかへる袖かも」(⑤)、「雲がくれゆく声のきこゆる」(⑧)等は多分に古今の発想や姿詞に似ているのに対して、

「萩の花散らば惜しけむ」(a)、「玉くしげ二上山に月かたぶき」(d)等は、いかにも万葉の五七調のものである。また、恋歌にしても、特に(ロ)など三句切ではないが、三句切に似た調べを持っているのに、(b)はむしろ二句切に近い調べを温存している。このようにして、概していえば、三集のうちでは統古今のそれが、いかにも万葉調らしい歌を採っていると言えそうである。

(b) 古今時代の主要歌人の歌はどのような比重をもって三集に採られているか。まず、数量的には次表の通りである。

実方	三集への撰入歌数		
	新勅撰	統後撰	統古今
4	7	6	14
2	7	7	9
3	5	12	16

忠岑	三集への撰入歌数		
	小町	友則	忠岑
1	0	6	3
3	0	4	3
3	2	8	3

(各歌の吟味は省略する。)

(c) 新古今時代の主要歌人の歌はどのような比重で、三集に採られているか。

まず、次の表の範囲内であれば、新勅撰において後鳥羽院の歌を一首も採っていないのは、当時の政治的配慮によるものであって、決して撰者定家の理念的偏向によるものではない。(新勅撰におい

内式親王子	三集への撰入歌数		
	通具	雅経	家隆
14	3	20	43
15	1	9	18
9	4	14	41

良経	三集への撰入歌数		
	有西	慈円	定家
36	4	14	27
28	3	13	22
28	7	10	11

て、後鳥羽上皇の歌が一首も採られていないのは、周知のごとく時の政治情勢によるものであって、定家の意志によるものではない。承久の乱の責任者として後鳥羽・土御門・順徳の三上皇の歌は、新勅撰時代の為政者の強力な指図によって、入集を拒否されたのである。(また、新勅撰で定家の歌が十五首に過ぎないのは、撰者自身の遠慮によるものと考えられる。従ってこの両者を除いて言えば、統後撰において数量的に新古今歌人の歌を新勅撰以上に優遇しているのは、ただ式子内親王一人にすぎない。そのことは、統後撰撰者為家が新古今風を敬遠したことの結果と見られる。ところで統古今においても、新古今歌人の歌に対しては、数量的には大方統後撰撰者の撰収率と大差がないようにも見える。しかし、家隆・雅経・通具・有家らの歌に対する撰収率は、統後撰のそれ(時には新

勅撰のそれ)を相当に修正するところがある。のみならず、後鳥羽院と定家との歌に対しては、統古今の撰収率は統後撰のそれをはるかに越えている。そういうところには、確かに統古今が為家の独撰でなかった事の反映があり、また、統古今における新古今の質的復活をも暗示するものがある。そういう数量的な傾向を念頭におきながら、更に三集に採られた新古今主要歌人の歌を具体的に例示し、質的に吟味してみよう。

一、新勅撰に採られている新古今主要歌人の歌

(イ) 名もしるし峯の嵐も雪と降る山桜戸のあけぼの空(春下・凸・定家)

(ロ) 来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ(恋・三三五・定家)

(ハ) ふみわけむ物とも見えず朝ぼらけ竹の端山の霧の下露(秋上・三九・家隆)

(ニ) 寂しきはいつもながめのものなれど雲間の峰の雪のあけぼの(冬・四三・良経)

(ホ) きえかへりくれまつ袖ぞしはれぬるおきつる人はつゆならねども(恋三・八四・西行)

二、統後撰に採られている新古今主要歌人の歌

(イ) 心あてにわくともわかじ梅の花散りかふ里の春のあわ雪(春

上・二六・定家)

(ロ) わが袖にむなしき浪はかけそめつ契りも知らぬとこの浦風(恋一・四九・定家)

(ハ) 少女子が袖ふる山のたまかづら乱れてなびく秋の白露(秋上・三〇・家隆)

(ニ) 天の河水をむすぶ岩波のくだけて散るはあられなりけり(冬・四五・良経)

(ホ) から衣たちはなれにしままならば重ねてものは思はざらまし(恋三・八四・西行)

三、統古今に採られている新古今主要歌人の歌

(a) 名にたかき天のかぐ山けふしこそ雲居にかすめ春やきぬらむ(春上・一・定家)

(b) かぎりなくまだ見ぬ人の恋しきは昔や深く契りおきけむ(恋一・九五・定家)

(c) 筑波嶺の山鳥の尾のます鏡かけて出でたる秋の夜の月(秋上・三八・家隆)

(d) 池水をいかに嵐の吹き分けて氷れるほどのこほらざるらむ(冬・六三・良経)

(e) 袖の上の人目知られし折まではみさをなりけるわが涙かな(恋一・二〇元・西行)

まず、新勅撰における定家の歌は、四季歌にせよ恋歌にせよ、その自撰歌であるだけに彼の晩年の庶幾する歌風を思わせると共に、表現も巧みで格調の高いものがある。それに比べると、統後撰に採られた定家の歌は、むしろ古今風の穏やかさがあり、微温的で平凡でさえある。しかし、統古今に採られた定家の歌は、格調が高いとまではいえないが、趣向の面白さがある。三集に採られた家隆や良経の歌についても、ほぼ同様のことが言えそうである。更に西行の恋歌についても見ると、新勅撰や統後撰のそれは、これが西行の歌かと思わせるほどに発想もむしろ常套的であり、姿詞も無難に整っている。ところが、統古今のそれは、「人目知られし折までは」などという詞足らずにつぶやくような散文的な表現と、「みさをなりけるわが涙かな」という端的な詠嘆が、いかにも西行らしいものを思わせる。新古今でも、これに類する西行の恋歌を採っていたのである。更に、統古今で定家の歌を巻頭にすえていることも、統古今撰者たちの新古今尊重の一端と見られるであろう。要するに、統古今には、新古今の世界に対して量的にも質的にも復帰しようとする傾向が確認されるのであって、そういうことは為家の独撰ではとうてい考えられないところであった。

以上、AからCまでは万葉・古今・新古今の三時代の主要歌人の歌がどういふ比重でもって統古今に採られているかを他の二集のそ

れと比較し、更に夫々の具体例について質的な吟味を試みたわけであるが、次には統古今五人の撰者を始め、新勅撰以後の歌人の歌が統古今にどういふ比重で採られているかを、先に検討を加えた方法、つまり、新勅撰・統後撰と比較しながら考察して行なうべからない。

(D) 新勅撰以後の歌人(すなわち統古今当代歌人)の歌は、どういふ比重で三集に採られているか。

光俊	三集への撰入歌数			歌人	三集への撰入歌数		
	新勅撰	統後撰	統古今		新勅撰	統後撰	統古今
4	0	0	7	家良	1	0	6
10	2	8	14	為家	3	0	11
30	17	21	26	宗尊親王	13	67	44
				平政村			

これらの人々は、いうまでもなく過去の歌人ではなく、いわば統古今現代の歌人である。従って、当代の撰集において前代よりも入撰歌数がのびているのは当然である。しかし、それにしても特に統古今の各撰者―家良・基家・行家・光俊・為家の入集歌数が著しくのびているのは注目し得る。新勅撰における定家(新勅撰入集歌数一五集)、統後撰における為家(統後撰入集歌数一一首)の場合

のように、もし独撰なら、自己の歌の多数入撰は遠慮してさしひかえるのが通例である。この事は、複数撰者なるが故に、各撰者が互に他の撰者の歌を多数撰したとも考えられるのではあるまいか。単独撰と複数撰との相違は、この数字にもあらわれている。

さて、これら各撰者の続古今入撰歌を、それぞれの新勅撰・続後撰入撰歌と具体的に比較してみよう。

まず為家の場合

新勅撰 春・二〇 たち残す梢も見えず山桜花のあたりにかかる由

雲

〃 秋・二五 片岡の杜の木の葉も色づきぬ早稲田のをしね今

や刈らまし

続後撰 春・二三 あたになど咲きはじめけむいにしへの春さへつ

らき山桜かな

〃 秋・四五 立田山よその紅葉の色にこそしぐれぬ松の程も

見えけれ

続古今 春・三五 よしさらば散るまでは見じ山桜花のさかりを面

影にして

〃 秋・五一 くちなしの一しほ染のうす紅葉いはでの山はさ

ぞしぐるらむ

前にも引用したところだが、井蛙抄(内)によれば、為家は続古今の

『続古今集』の基礎的研究

とき「我が撰進の歌の外は一事以上不可_レ有_レ甲手細_レとて口を閉ぢ侍りき」ということである。すなわち、為家は続古今撰進にあたって、為家の独撰を許されなくなったことに大きな不満をいだきながらも、一応、その撰歌はしているのである。従って、その撰歌中には、おそらく自詠中から自撰した若干首も含まれていたではあろう。しかし、右にかかげた続古今中の為家歌が果して為家自撰のものであったかどうかは知る由もない。新勅撰・続後撰に撰はれた為家歌の平明さに比較してみると、続古今中の為家歌、特に右に掲げた二首などは、趣向も巧みで、かなり派手な歌と受けとめざるを得ない。光俊は、秋風抄序文において、「前大納言為家卿は、よく歌のおもむきを立て、その詞たくみなり。しかも艶なるをもととしてやさしきをねがへるにや」と評しているが、そういう為家評は、前引の為家の例歌のうちでは、新勅撰や続後撰中の歌に対してというよりも、むしろ続古今中の歌に対して、もっともよく当てはまるように思われる。従って、そういう為家評は為家自身の志向にとつては心外なものであるかもしれないし、同時に続古今中の為家歌には、為家の自撰でない歌も含まれている可能性を暗示する。しかし、その為家の自撰のみでないことが、却って為家の個性を、より客観的に把握させる機縁となつていても考えられる。すなわち、続古今中の為家の歌は、為家の自撰か否かを問わず、為家の歌であ

ることにはわりはない。従って、為家自身の内在的志向は明らかに
続後撰に自撰した歌どもの側にあったとしても、統古今に撰ばれた
歌は、為家の詠風以外のものであるとは言えない。もし、統古今中
の為家歌中に、為家以外の撰者達が撰んだ為家の歌も含まれている
とすれば、むしろそこには客観的な立場からする為家評価がうかが
えるのではあるまいか。それはともあれ、新勅撰・続後撰中の為家
歌と統古今中の為家歌とを対比してみると、後者の方に、より艶
で、より技巧的な歌が多く含まれていると見られる。

光俊の場合

新勅撰 秋・三三 明石渦あまのたく繩くるるより雲こそなけれ秋
の月影

〃 雑・二四 しのぶるもわが理と言ひながらさても昔をとふ
人ぞなき

続後撰 冬・四四 冬の来てしぐるる時ぞ神南備の杜の木の葉を降
りはじめける

〃 雑・二五 つらしとも憂しとも更に嘆かれず今はわが身の
ありてなければ

統古今 秋・四八 人をこそ待たずもあらめ曇れとはいかが思はむ
秋の夜の月

〃 冬・六二 霜枯れの横野の堤かぜさえて入湖とほく千鳥な

くなり

〃 雑・二五 時しらぬ身とも思はじ秋くれば誰が袖よりも露
けかりけり

新勅撰・続後撰・統古今の三集を通して、光俊の歌は事理もたし
かで、しらべの引きしまった歌が多いように思われる。そのことは
光俊自身が「簸河上」において、「たけたかく遠白き、第一とぞ覚
え侍る」と言った詞とかなり密接に呼応するところである。しかも
そういう光俊の特色は、新勅撰・続後撰中の光俊歌よりも、統古今
中の光俊歌の方に、より多く發揮されているようである。特に、統
古今中の「横野の堤かぜさえて入湖とほく」の歌などは、写実的な
構成のなかに、遠白いものへの野心的なねらいが多分に織り込まれ
ている。

家良の場合

新勅撰 春・三 玉ぼこの道の行く手の春風に誰が里しらぬ梅の
香ぞする

〃 秋・三九 白砂の月の光におく霜を幾夜かさねて衣うつら
む

続後撰 春・三三 桜花おちても水のあはれなどあだなる色には
ひそめけむ

〃 秋・六九 山鳥の尾の上の里の秋風に長き夜さむの衣うつ

なり

続古今 春・六 山の端にかすめる月は傾きぬ夜深き窓に匂ふ梅

が枝

〃 秋三三 夕されば露吹きおとす秋風に葉末かた寄る小野

の篠原

家良の詠風は大体に穩健で、とくに特色めいたものを指摘しにくい。そういうところにも、彼が御子左家の人々からも反御子左家の人々からも好遇された所以があろう。しかし、強いていえば、彼の場合においても、続古今に採られた歌は、新勅撰・続後撰に採られた歌に比較すると、感覺的なものが、抒情的なものよりも大きな比重を占めている。

基家の場合

続後撰 夏・六 鳴きぬべき夕の空を時鳥またれむとてやつれな

かるらむ

〃 冬・四 片岡の朝けの風も吹きかへて冬の景色に散る木

の葉かな

続古今 秋・三九 あなし吹く弓月が嶽に雲消えて檜原の上に月渡

る見ゆ

続古今 冬・四七 惜しみえぬ涙の露を形見にて袖に残れる秋もは

かなし

〃 冬六〇 かれがれに霜置きまよふ冬の日の夕かげ山の道

の芝草

基家の歌は前節でも述べたように、定家との反目の故か、新勅撰には一首も採られなかった。続後撰中の基家の歌は敢えて異風というほどのものでない。ところが、続古今に採られた基家の歌には、とくに「あなし吹く」の歌のごとく端的に万葉的表現を模倣した作品さえが見られるのである。もちろん、万葉歌人の客観的叙景の再現ではなくて、観念的な立場から万葉的表現の感覺的構成を試みたものではあろうが、それは確かに御子左一派の詠風に対しては、きびしく正反対の立場にある詠作といえることができる。もしも、こういう歌がもっと多く続古今に採られていたならば、続古今の特色はさらに顕著なものになっていただであらう。ただ、おしむらくは、こういう万葉ばりの歌は、やはり数えるほどしかなく、しかもそれが他の中世的な歌とむしろ不調和な姿で混在しているというところに、続古今の実体があるかと考えられる。

行家の場合

続後撰 夏・六 榊葉に卯月の御しめ引きかけて三室の山は神祭

るなり

〃 恋・五 伊駒山峯に朝ある白雲のへだつるなかは遠ざか

りつつ

統古今 夏・三七 人よりもまつ聞けとてや時鳥わがしめし野の方

になくらむ

〃 恋・九六 知らせばやそこはかとなき浮雲の空にみだるる

心まどひを

〃 恋・三三三 何とかはわが身を置きてあまの住む里のしるべ

を人に問ふべき

行家の歌も新勅撰には見られない。(新勅撰にも藤原行家という人の一首(四四六)が見えるが、それは藤原行国の子であって、知家の子行家ではない)。行家の詠風は、右に掲げた歌どもにうかがえるように、歌意にあいまいなくともなく、詞すなおに、すすくと詠み流している。いかにも六条藤家の末流らしい詠みぶりである。そして、その統後撰に採られた歌と統古今に採られた歌との間にも、特に言うほどの懸隔は認められないようである。

以上、新勅撰以下の三集に採られた歌に即して、統古今撰者五人の詠風をながめ、あわせてその五人の歌が三集においてどういふ相違を示しているかを吟味したわけである。これら五人の詠風には、当然のことながら、それぞれの個性が認められるが、概していえば、統古今に採られた歌は、新勅撰・統後撰に採られた歌に比較して、より顕著に個性的である。のみならず、統古今に採られたこれら五人の歌は、他の二集に採られた彼らの歌よりも、あるいは、よ

り技巧的であり、あるいは、より感覺的、写實的であり、あるいは、より異風の的であるという、大体の傾向が看取できるのである。

更に、統古今では、宗尊親王の歌が誰よりも多く(六七首)採られているという事実は、諸家の指摘するように、確かに注目すべきところである。これは通説にいわれているように、あるいは光俊が関東に下って親王の歌の師になっていたことが、必然的にもたらした結果かもしれない。しかし、すでに政治の実権が関東に移って以來、京方の関東方に対する卑屈な遠慮は、すでに一般的なものとなっていた事実も考えねばならない。すなわち、たまた光俊が宗尊親王の歌の師であったからというだけでは何か割切れないものがある。

たとえば、為家も古今集為家抄(弘長三年成立)を宗尊親王に進上しているのである。むしろ五人の撰者が、ともに関東に対する卑屈な態度からして、將軍宗尊親王の歌を誰よりも多く採り入れること、更には平政村の歌などもかなり多く採ることに反対できなかったのではあるまいか。そのことは、すでに新勅撰においてさすがの定家さえが將軍実朝の歌を二十五首(集中第六位)も採ったのみならず、関東の無名歌人どもの歌をかなり採り入れざるを得なかった先蹤に思いあわせられる。

それはともあれ、統古今に宗尊親王の歌が最も多く入撰している事実を重視するあまりに、統古今の世界は宗尊親王の歌風で大きく

塗りつぶされているかの如き錯覚におち入ってはならない。それは、たとえば西行の歌が新古今に最も多数入撰しているからといって、新古今の世界は西行風であるといえなかつたのと同様である。従って、まず統古今に採られた宗尊親王の歌は、どういふ歌であつたかを吟味してみなければならぬ。

統古今 春・七 大伴のみつの浜松かすむなりはや日の本に春や

きぬらむ

〃 〃・五 わたつ海の波のちさとや霞むらむ焼かぬ潮瀬に
たつけぶりかな

統古今 春・七 あすか風河おと更けてたをやめの袖にかすめる

春の夜の月

〃 夏・八 花ぞめの袖さへけふはたちかへて更に恋しき山

桜かな

〃 秋・四 真萩ちる遠里小野の秋風に花ざり衣いまやうつ

らむ

〃 秋・五 しがれぬと見ゆる空かな駕なきて色づく山の秋

のむら雲

これらの歌を通覧すると「大伴の御津の浜松」とか「真萩ちる遠里小野」などの如く、確かに万葉の用語を借用した歌も散見されるが、全体としては、とても万葉調と言ひ切れるほどの歌風ではな

い。強いていえば、素直にのびのびとした歌が多いかと思はれるが、それもむしろ統古今の特性を強調しうるほどの特異性もつてはいないのであるまいか。すなわち、宗尊親王の歌は、たしかに統古今中第一位の入撰数をもつてはいるが、統古今の性格を特徴づけるほど大きな要素とはなっていないと考えられる。平政村らの歌も同然である。

なお、その他の各家各派の歌人の歌も統けて吟味すべきであるが、あまり長くなるので省略する。

結 語

以上、三章八節にわたって、統古今集の世界に対する若干の問題を提示し、それに対する基礎的な考察を試みた。その結果、御子左家重代撰者の独撰でなかつた統古今を、師範家的な視野から不当に低く評価し続けてきた俗論に対しては、拙いながらも、いくつかの根拠をあげて再検討の余地を開拓したつもりである。と同時に、統古今を直ちに反御子左派が主導権をもつた撰集として、その反抗という点だけで評価しようとする軽率な論に対しても、できるだけ慎重に戦ってきたつもりである。そういう過程において、各章各部に提示した個々の問題点については、それぞれの章節において、私見をまとめておいた。したがって、ここではむしろ補足的な意味にお

ける結語を簡単に述べるにとどめる。

統古今が成立した時代は、いうまでもなく中世文化の歩みが、封建的・武家的・隠者的・法中心的・情否定的な性格をますます濃厚に強固にしつつあった時代である。長い伝統を持つ閉鎖的な和歌文学ではあっても、こういう歴史社会的環境から全く無縁であることはできなかった。しかし、和歌文学の世界は何と言っても旧貴族層が死守する最後の拠点でもあったので、この統古今においても、それら中世の基本的諸性格が公式的全面的に反映しているとは言えない。たとえば、武家的性格が特に統古今で急激に進出しているなどとはいえない。しかし、武家的性格とまでは言えないまでも、関東地方の干渉や圧力が勅撰集に対してさえ加えられるという現象は、すでに新勅撰以来、露骨にはじめていた。そして、この統古今においても、将軍宗尊親王の歌を最も多く採ったことなどは、新勅撰において実朝をはじめ関東武人の歌をかなり多く採った態度の延長という程度において把握することはできるであろう。また、隠者的性格という面でも、すでに千載あたりから徐々に深まりつつあったが、その千載の撰者俊成が出家の身であったことを思えば、この統古今の撰者五人のうち、為家と光俊がすでに出家の身であったことも不思議ではあるまい。更に、撰者の問題をめぐっては、統古今が古今・新古今の先例にならって複数制をとり、師範家を家の独撰を

拒否したことは、一見しては時代の流れに逆行する復古的体制ともみられるかもしれない。すなわち、すでに千載・新勅撰・統後撰と三代の勅撰集にわたって、御子左師範家の独撰が固定しかけていたことは、中世一般の封建的なものへの流れからみれば、むしろ必然的な動向である。にも拘らず、統古今は古今や新古今のそれにならって複数撰者制を取り、封建的な独撰を許さなかったのである。しかし、御子左師範家の人々の歌風には、なお古代的抒情の性格が軌拗に残存していたことを考えねばならない。そして、統古今が為家以外の撰者を加えることによって、その御子左家風の抒情的性格を幾分かも新しい感覚的方向に牽制しているとすれば、それはまた情否定的性格という面で、やはり新しい中世の流れに即応するための一つの新体制であったと考えられる。それはともあれ、そういう中世文化一般の公式的な類型のみから統古今の世界を概観しても、統古今の本質とその歴史的意義とは十分には究明し切れない。従って、更に進んではやはり統古今のユニークな実体そのものに迫ることが要請される。

統古今は複数撰者を持つことによって、まず撰集の多様性と正確度を増していることは、本稿によってほぼ明らかにした。撰者を複数にするということは、もちろん、古今・新古今の先例にならうものではあったが、ただ統古今の場合は、古今や新古今、とくに

新古今の各撰者のそのようにほぼ同一方向に統一された立場においてではなく、五人の撰者がそれぞれ異趣同舟的な立場において協力を強いられているという点に深く注目しなければならぬ。そこに、同じく複数撰者の形態を採りながらも、続古今の場合は古今や新古今の場合とは実質的な相違があると言わねばならない。しかも、それは為家以外の四人の撰者がすべて反御子左派の色彩で一致していたとも言えなかったし、また光俊一人が五人の撰者の中で、圧倒的に強大な発言権や統轄権を持っていたとも断定できなかったのである。そういうところにも、続古今が正確度とか多様性とかにおいて、たしかに注目すべき撰集となっているにも拘らず、御子左家の封建的規範に一拳に取ってかわるほどの今一つの強力な封建的規範となりえなかった所以があろう。

そういう点に問題はあったにしても、むしろ激しく対立する五人が、その激しく緊張した反目と抗争とのなかに、ともかくも一つの撰集をなしとけているという結果自体は、大いに注目されむばならない。それは全く和歌史上他に比類のない現象であり、その事実だけでも続古今の存在意義は看過できない。しかも、その続古今の内容を質的に吟味してみると、それもまた果して前後の撰集に比類のない特異な世界を形成しているのである。最大公約数的に言えば、それは抒情的構成というよりも感覺的構成という面で、より面白く

新しいものを生産していると見られる。が、そう言ってしまうには、これはまたあまりにも複雑に特異な存在である。たとえば「あなし吹く弓月が嶽に雲消えて松原の上に月渡る見ゆ」(基家)というふうに、万葉歌の極端な直訳的模倣作品があるかと思えば、「にはひくる花橘の袖の香に涙つゆけきうたたねの夢」(俊成)というふうに新古今的妖艶を上まわって官能的妖艶を極める歌も採られているのである。そういう両極端の歌が「よしさらば散るまでは見し山桜花のさかりを面影にして」(為家)「神ぬらす老曾の杜の時雨こそうきに年経る涙なりけれ」(光俊)などという徹底的な歌と相並んでいるのである。それも単純に見れば、五人の撰者のまぢまぢの尚好を反映した多様性ということで片付けられるかもしれない。が、かりにそうであっても、その多様性自体はありふれた多様性でなくて、「あなし吹く」と「にはひくる」とのように、激しい両極的対立を内包する特異な多様性である。その点で続古今は一つの新しい文藝的価値と大きな史的意義をもっている。同じく複数撰者の所産である古今や新古今でさえ、これほどまで振幅の大きい多様性はないなかった。ましてそれは、単独撰の先行撰集では夢にも考えられない存在であった。

こういう徹底した両極的対立を持つ続古今の多様性の開拓があったからこそ——それはまた続拾遺以後しばらく二三条家の単独撰集に

よって否定されたとはいえ——時至って、玉葉・風雅の世界を生む大きな踏み台になっていると考えられる。玉葉・風雅の世界を新古今の延長とする故風巻博士の説は、『新古今的なるものの範囲』〔『新古今時代』所収〕人文書院、昭一一・七）最近、次田香澄博士らの研究〔玉葉集の形成〕日本学士院紀要、昭三九・三、「風雅集の形成」国語と国文学、昭三八・五）によって否定されかけている。しかしながら、新古今と玉葉・風雅とを一直線に結びつけようとするところには、確かに印象批評的な危険性と無理な付会のおそれもあるように思うが、その間に、この続古今の振幅の広い多様性の世界をおいてみると、風巻説は決して一概に否定さるべきものではない。というよりは、風巻説は続古今の世界を媒介にしてこそ、よりの確な文学史的考察となりうるであらう。

ともあれ、続古今の徹底した両極的多様性をただ単に多様性の不統一と責める前に、むしろ類例もないほど特異な多様性のあらわれとして、文学史的にも再認識する必要がある（昭三九・一二・二四）
入付記▽ 脱稿後に、樋口芳麻呂氏の「続古今和歌集目録当世とその意義」（愛知学芸大学研究報告一四輯、昭四〇・三）という論考が発表された。続古今当代歌人の入撰歌数や伝記を確かめうる貴重な資料の紹介であるが、本稿の論旨とは直接の関連をもたない。